

無論初刊部数自体がかつての半減であつたにせよ、それなりに動くものの、かつては売上部数が毎年一定数は見込めた既刊書が激減、壊滅的な状態で、結果的に新刊準備に回す余裕がなくなっているという。簡便な教養書の形態である新書だが、最近はたとえば川田稔『昭和陸軍全史』全三卷（講談社 1・2は二〇一四年、3は二〇一五年予定）のような読み応えがある書も出ている。一般書の体裁だと出版しにくくなっているのかと考えていただけに、新書でさえそのような状況であることには暗然とさせられた。

右記のことどもから見えてくるのは、大人が「大人としての読書」をしていない、今日の「読書」の状況である。全集の不人気については、保管場所確保の困難といった側面もあるだろうが、推測を交えつつ問題を次のようにまとめることができるのではないか——広く「教養」的とみなされる大人の読書需要は全体として縮小している、その一因として「大人読者」に順次参入するべき若年層が、従来の定番であつたような「大人の読書」から離れてしまった、そんな状況の中でも「読書」関係者の関心は現在の「子ども」にしか向いていない……と。

このまとめには、しかし、反論も出されるかもしれない。新聞等の広告では莫大な刊行部数を誇示する作品も少なくない。特に近年は書店員が選考の中心になった賞などで「候補作」の数々を平積みする様もしばしば見受ける。だ

が、一部エンターテインメントの盛況の内実に目を向けるなら、別の問題が浮上する。あえて書名はあげない。たまたま覗いたある作品——冒頭からほどないページに太平洋戦争勃発に至る経緯について歴史的事実の意図的改変と思われる記載を見つけて驚かされたものだ——は、書店員たちの眼鏡にかなったばかりか、受賞作として現に大いに人気を博した。このことは、歴史的事実からの逸脱の問題を孕む作品に関して、たとえば長谷川潮「ぞうもかわいそう」〔季刊児童文学批評〕一、一九八一〕や山中恒・山中典子『間違いだらけの少年日』（辺境社 一九九九）といった論の内容を紹介してもなおかつ、「事実と違っていたって何が悪いのか、フィクションなのだから」といった反発をしがちな学生たちの反応を、容易に連想させる。

ここに存在する「大人読者」は、要は、「感動」を求めることに墮しているのである。付言するなら、「読書」行為には何らかの意味づけができればならないといった強迫観念を持ち、一番手っ取り早い意味として「感動」に飛びついたという次第だろう。

こうした傾向を助長するような新聞記事も最近見かけた。『読売新聞』二〇一五年一月十五日付の「くらし」欄、「大人も泣ける絵本は何？」である。記事のなかでは、インターネット掲示板に寄せられたこの質問への様々な投稿／回答が並べられており、中には「涙活」Ⅱ「意識的に涙を流す